出番を待つ隠岐いぐり凧

長谷川眞常

先日、北日本新聞紙上にも紹介されたように当泉ビル三階には、５月１７日(日)庄川河川敷大門カイトパークで開かれる第３１回越中だいもん凧祭り（全国有名凧揚げの部）に向け、はやる気持ちを抑えながらいまや遅しとその出番を待つ風神・雷神の描かれた大型の、一双の隠岐いぐり凧が待機しています。

遠く天保年間(１８３０年)から隠岐に伝わるこのいぐり凧は、長方形の辺縁に１０個のえぐられた耳が付いていることから、えぐるが訛って『いぐり』になったと言われています。強い季節風の吹く隠岐の島に生まれ育った凧だけあって、細めの竹ひごを格子状に組み、更に１０個の耳を付け一見ひ弱そうに見えますがタテの線の要所、要所に女竹(めだけ)を入れ、特に背骨となる中心棒は女竹の途中から破竹竹(はちくたけ)を組み込んで補強し、その竿の先端に長い尻手竿(しってざお)を接続し、藁縄の尻手が続きます。

一方ヨコの線では、補強をかねて凧の背中に物干し竿ほどの破竹竹で作った弓がくくり付けてあります。この弓に張る弦は、荷作り用のビニールバンドを用いてあるため、強い風に共鳴し「ブルーン、ブルーン」と唸り声をあげながら飛翔するのがこの凧のもう一つの特徴で、その揚がる姿は真に勇壮です。

ところで今回３階凧工房に収まっているそのいぐり凧が誕生するまでのいきさつを考えた時、私が少年時代から持ち続けた隠岐いぐり凧への郷愁が、今この歳になってこの富山の地で蘇り、幾つかの偶然を経、奇跡に守られながら出来上がった、曰くつきの、また夢一杯の凧のように思えてなりません。

１）代谷松男画伯との出会い

と申しますのも今から丁度１年前、長谷川病院創立３０周年を記念し，越中だいもんの凧祭りに向け孫達のために作りはじめた和紙張りたてのいぐり凧（タテ１７５cm ヨコ１４８ｃｍ、約１、６畳大）を初めて目にした代谷松男先生が、『オ！ここに面白いキャンバスがある。是非これに絵を描きたいナ！子供たちも一緒に絵付けをしよう！』この一声があってから間もなく岡本太郎ばりのインパクトのある竜の描かれたいぐり凧が出来上がりました。唸りを上げて越中大門の空を飛翔するその勇姿は２００８年７月１５日版「医報とやま」の表紙絵に紹介させていただきました。

その凧祭り当日、この竜のいぐり凧の揚がる姿をみた先生から『出来れば来年はもっと大きい凧に、動きのある風神か雷神の絵を描いて会場の反応を観たいものだネ！』とのご提案がありました。

先生のこの一言が、凧を作る立場の私の心の中に大量の油を注ぎ込む結果となり

ました。

お互い酒の大好きな後期高齢者同士の老医と画家が、程よくまわったアルコールの席で「折角作るのだったら同じ大きさの凧を２枚作り、俵屋宗達に代わって代谷松男氏の描いた『**平成の風神・雷神の図**』と題し、一双の凧として左右同時に、バランスよく、轟音を響かせながら越中大門の空高く揚げてみよう」と言った、多くの凧師達が考えたこともない、かなり大胆な構想が浮かび、私としては今まで手がけたこともない４・５畳という大型で、且つ双似型のいぐり凧作りが始まりました。

２）時と人と

昨年４月から長谷川徹院長、十二町明副院長に加えて大武礼文先生が常勤医として診療に参加されたことにより診療面が今までになく充実し、理事長の心と体に少なからぬゆとりを作って頂きました。今回の凧作りのきっかけを作ってくださった若い先生方に先ず以って感謝いたします。

更に私のいぐり凧作りに興味を持ち、３階の凧工房に足しげく歩を運び、八尾の山里の竹取りから始まり凧の製作、調整にいたるまで終始私の手となり足となって手伝ってくれた山本、大場両氏の存在も大変大きな力となりました。

私の人生においてこのタイミングと助っ人の存在、神は私にチャンスを与え下さいました。

３） 凧工房のこと

神は私にすばらしい場所も提供して下さいました。

タテ３００cm ヨコ２５０cm、４畳半の大きさの凧を作るためにはそれだけの広い作業場が必要となります．泉ビル３階はそのうちテナント希望の方がお入りになるかと思いますが、今回はたまたまスケルトンの状態で空いており早速凧工房に変身しました。

スケルトンの床から天井までの高さを計ってから凧の設計図を起こしたわけではありません。しかしいざ組み立てた凧を立て掛けて見て初めてギリギリぴったりの大きさだったのに気付き唯ただ神に感謝しました。

更に出来上がった凧を運び出す段階を考えた時、タテ、ヨコともにエレベーターには入り切らず、病室として作られたビルの窓でも狭すぎます。ここでも神は我に味方しました。昭和５３年クリニックとしてスタートしたこのビルの３階の一部は住宅だったため、狭い和室に精一杯の大きい窓が取り付けられていました。後になっておそるおそる計測したところ、幅１３０cm の２枚のサッシを外せば何とか持ち出し可能であることが判明し、ほっと胸をなでおろしました。

４）絵付け

立て掛けた３ｍの凧に下絵を描く時にはどうしても脚立が必要です．しかし画伯の年齢を考えると折畳み式の脚立では危険を伴います。二つの脚立に厚い板を渡してなどなど思案に暮れていたところに助手のお二人が病院地下倉庫から格好の踏

み台状の階段を見つけてきました。２０年前、初期の結石破砕装置　ＥＤＡＰ　ＬＴ－０１の治療台に登るために特注で作らせた幅の広い階段で、まさにこの日のためにとって置いたといっても過言でない代物でした。

身体のバランスをとる為のポールも取り付けた３段の踏み台にのぼり、悠々と下絵を描いている代谷先生の無心の姿が思い出されます。

下絵を描き終え絵付けの段階では凧を仰向けに寝かせ、その上に乗りかかった位置で筆を運ぶ必要があります。ここでも天は我に味方しました。

助っ人の二人が、たまたま取り壊しの始まったお隣の星井町小学校の廃材の中から目ぼしい角材を貰い受け、仰向けの凧をはさんで２本並べた角材の上に厚いベニヤ板を乗せ、これを台座にして座り込んだ先生は、二人の助手を相手にアッと言う間に迫力一杯の風神・雷神の絵を書き上げられました。「気分良く描けた。とても楽しかった。」これが描き終わった先生の最初の言葉でした。

５）糸目糸の調整

不思議なものでここでも天は味方しました。

クリニックスタート時、３階透析室として使ったこの空間は壁が少なく１２ｍの広さがあります.「その大きさの凧だったら出来れば長めに１０ｍの糸目糸をつけなさい」とご指導頂いた隠岐いぐり凧保存会の富田先生からのご指示もピッタリクリヤー出来ました。

６）可能性の検証

昨年だいもん凧祭りで自作の凧を揚げる前に、一度本場の隠岐いぐり凧の揚がる様子を見、凧の扱い方を学習するため家内を連れて隠岐に渡ったときのことです。

海を渡り岬にぶつかった風が上昇気流となり、大小様々のいぐり凧が軽々と、大きな唸り声をあげながら一斉に上昇し、上空でお互いが絡むこともなく安定した飛翔を続けている姿は、大人と一緒になって苦労していた子供の頃の想い出とは全く別世界のものでした。立派な完成度に裏付けされた隠岐のいぐり凧です。

出番を待つ風神・雷神一双の凧も、大会当日程よい風さえ吹けば必ず揚がってくれる筈です。

しかし私を始め病院スタッフは誰一人、この４畳半という大きい凧を揚げ、操ったことがありません。しかも左右同時に、一斉にバランスよく揚げることで、富山の人々から喜ばれ、拍手喝采を頂かなければなりません。

有志を募り４月の始め隠岐への研修旅行を行い、５月１７日越中だいもん凧祭りに備えたいと考えている今日この頃です。

２００９，３，２６